地羅末提とは、同語の異譯たるに過ぎぬことはいふまでもない。併しまた別に玄奘の西域記巻九、巻十一等に見える堅慧といふ名に對して、ジュリアン (S. Julien) がまづ Sthiramati の形を與へた以來、多くの人は之に從ひ、また入大乘論の著者として知らるゝ堅意といふ名も、之と同一であると見る說が隨分廣く行はれて居るやうであるが、此等の說については、曾てペリー (N. Peri) 氏は、堅慧・堅意は Sthiramati では無くして、實は Sāramati に應ずべき名であることを論じた。[9] 兎に角この俱舍論實義疏の著者である Sthiramati が、唐に安慧と譯されて居つた人であることについては一點の疑も無い。さて此の安慧の俱舍論の疏といふものに就いては、唐代以後二三の文獻に於て、其の片鱗を窺ふ事が出來る。即ち普光の俱舍論記巻第一之餘に、俱舍論の亂心無心等隨流淨不淨といふ頌について述べた中に、安慧菩薩俱舍釋中救云、衆賢論師不得世親阿闍梨意云々と記して、順正理論の所說を駁した事を引いてあり、また慈恩の唯識論述記にも、前に引いた所に續いて、即糅雜集、救俱舍論、破正理師、護法論師同時先德云々と見えて居る。我が普寂上人は、其の俱舍論要解に、傳和順密及安慧論師作俱舍釋、遮正理難、并不行世、惜哉と記してゐる。安慧が俱舍の釋を著はしたことは、此等の記事によつて疑無い次第であつて、本書即ち阿毗達磨俱舍論實義疏といふものは、正に之に相當するもので無ければならぬ。衆賢は順正理論や顯宗論に於て、世親の俱舍を破したものであるが、茲に引いた諸書には、かく安慧が其の釋中に於て、更に衆賢論師の說を辯駁したと記されて居る。本書中諸所に「衆賢云」と見え、その下に Saṅgabadri 即ち Saṅghabhadra 云ふとしてその考を述べ、これに對して「疏主云」として、その下には ästiramati[9a] (時には istiramati とも書く、001, 93 表の如し) 即ち Sthiramati 云ふとして、前者に對する駁論を述べてある。之によつて見ても、此の疏を作つた人即